



兵庫県人権啓発活動
シンボルマーク

きずな

2011年
(平成23年)

7

ささえあう
ひとつひとつ

特集テーマ
いのち
〜東日本大震災によせて〜



2 アトリエ太陽の子 (神戸市東灘区)

3 いのちを考える

上地安昭さん
(神戸カウンセリング教育研究所代表、兵庫教育大学名誉教授)

4 長男の死を乗り越え
若者たちに震災体験を語り継ぐ

庄野ゆき子さん(人と防災未来センター語り部)

5 自殺のない「生き心地のよい社会」を目指して
根岸親さん(NPO 法人自殺対策支援センター ライフリンク副代表)

6 まちのKIZUNAレポート
子どもNGO「懐」(新温泉町)

7 ふれあいサロン

8 情報ふらざ

7月1日

国民安全の日

国民の一人ひとりが生活のあらゆる面で、安全確保を心掛け、災害の発生防止を図ることを目的に1960(昭和35)年に制定。同日から7月7日までは「全国安全週間」であり、労働災害や交通事故防止等の啓発行事などが開かれます。



3月11日に発生した東日本大震災をはじめとする自然災害、多発する悲惨な事件・事故、そして虐待や自殺など、私たちの周りには「いのち」にかかわるさまざまな問題が後を絶ちません。今月号は、自分も他人もかけがえのない存在であることをあらためて実感し、家庭や学校、地域、職場などで「いのち」の尊さについて今一度、考えるきっかけとなるよう編集しました。

被災者たちを癒やした 千枚の桜の絵

近ごろの話題

アトリエ
太陽の子
(神戸市東灘区)

神戸市東灘区で造形・絵画教室「アトリエ太陽の子」を主宰する中嶋洋子さんは、東日本大震災の被災地に希望の春を届けたいとの思いから「1000本の命のサクラプロジェクト」を実施しました。県内の小中学校などの協力も得て千枚の桜の絵を描き、4月24日から9日間、岩手県と宮城県へ支援物資とともに届けました。桜の絵は両県の小学校や避難所に貼られ、被災者たちを癒やしました。さらに、中嶋さんは被災地の8つの小中学校で絵画教室を開催。子ども

▼児童、生徒たちが描いた桜の絵



7月31日(日)に県立美術館王子分室で被災地での支援活動の報告会を開催。詳しくはアトリエ太陽の子 TEL 078 (858) 7301へ。



▶昨年6月、県立佐用高校で開催した「いのちのヒマワリ」



▼こいのぼりを描く被災地の子どもたち (気仙沼市立階上小学校)



▲教え子たちによる震災の絵を整理する中嶋さん

もたちとともにこいのぼりを描き、励ましました。自身も16年前の経験から、被災者の心のケアがどれほど大切か理解しているからです。

中嶋さんは阪神・淡路大震災で教え子2人を亡くしました。以来、子どもたちに震災の経験を伝え、生きる力をつけてほしいとの願いを込め、画法を教えるだけでなく、子どもたちに絵を描く意味や生きる意味について問い掛け、両親への感謝の思いや困っている人の役に立ちたいという気持ちも育んできました。これまでに県内外の学校園を回り、子どもたちと復興の象徴であるヒマワリを描く「いのちのヒマワリ」も展開。犠牲者6434人と同じ枚数を描くことを目標に掲げています。

中嶋さんは、「いのちのヒマワリ」と並行しながら、東北への支援活動も続けていきたいと言います。避難所の子ともたちと交わした再訪の約束を果たすためにも。

メッセージ

いのちを考える

う え ち
や す あ き
上地 安昭さん

神戸カウンセリング教育研究所代表
兵庫教育大学名誉教授



プロフィール
沖縄県出身。1969(昭和44)年、広島大学大学院博士課程修了(教育学博士)。兵庫教育大学名誉教授。1998(平成10)年から兵庫県立心の教育総合センターの初代所長を8年間務めた。2011(平成23)年、神戸カウンセリング教育研究所の代表に就任する。『教師カウンセラー・実践ハンドブック』(金子書房)など著書・訳書は多数。

「いのち」について語ることの難しさ

「いのち」について語るたびに複雑な思いに駆られます。「『いのち』は人間にとって何ものにも代えがたい大事なものと語ることによって、果たして本当にそれが相手に伝わるものなのかどうか、確信がもてないからです。人間の「いのち」には、語るだけでは言い尽くせない計り知れないものがあります。

極端な表現ですが、「一人の人間の『いのち』は地球よりも重い」と言います。しかし、万物の中の人間の「いのち」の最高価値を実感することは、実際のところ決して容易ではありません。ただし、

過去において重大な「いのち」の危機に遭遇した体験がない限りにおいてです。つまり、「いのち」について語るには、それこそ「いのち懸け」でかかわる覚悟が望まれます。

「いのち」をとりまく危機的環境の認識

昨今、日常生活の中で「危機」という言葉に触れる機会が目立って多くなっている現状を憂慮せざるをえません。

自然災害(震災)の危機、原発事故による危機、不況による失業の危機、家庭崩壊の危機、食品汚染の危機、救急医療の危機、高齢者介護(福祉)の危機、経済的困窮やうつ病等による自殺の危

機、地球温暖化による自然環境破壊の危機など、われわれの周辺で頻繁に見聞するこれらの危機的事態は、混迷する昨今の社会情勢を危惧する重大なサインとして受け止める必要があります。

つまり、地球上の人類の存亡(「いのち」)にかかわる重大な危機的事態に、われわれは今まさに直面しているとの認識に徹することが求められていると言っても、決して過言ではありません。

「いのち」の尊さを実感し「生きる力」を育む
平和な時代に平和な国に育った若者へ、他国の戦争や紛争の悲惨さの現実を一生懸命説いても、身近で重大な危機的問題として

実感することは困難ではないでしょうか。

この意味で、自国で起こった東日本震災は、想像を絶する膨大な犠牲者のためにも、私たちは「いのち」の尊さと「生きる」ことの大切さを自らの問題として実感する必要があるのではないかと考えます。

この度の未曾有の東日本震災の被災体験を教訓に、あらためて「いのち」をいかに守り、これからの危機社会を生き抜く「生きる力」をいかに育めばよいのか、今こそ、私たちの真価を発揮する機会ではないかと考えます。



次代にどう伝えるか



長男の死を乗り越え 若者たちに震災体験を語り継ぐ

しょうの
庄野 ゆき子さん 人と防災未来センター 語り部



口癖でした。今も聡さんが使っていた調理道具を大切に

の店を持つことが夢で、「お母さんの面倒は僕が見る」が

閉じ込められました。先に発見された犬が、駆けつけた

亡くなり、庄野さんも愛犬とともに14時間もがれきの中に

長男を亡くし
自身も生き埋めに

の重さを多くの人々に伝えたいという思いからでした。

残っています。子どもも好きだった聡さんは、まだ幼かった

センターだけでなく、要請が

時間をごり埋めていけばいいのかと苦しみました」と続

みは、震災直後よりもしばらく時間がたつてから訪れま

います。「あの日のことが鮮明によみがえってきます。一種の

子どもたちに
伝えたいこと

の命日には欠かさずプリンを供えてくれます。

ついても語ります。講演後、子どもたちから、「いのち」の

命が失われていますが、子どもたちは、親より先に死ぬ

全員が涙を流しながら聞き入りました。

た悲しみをこらえ、人前で泣くことを我慢し、誰もいない

ある日、庄野さんは市外から来館した中学生たちに、

「震災当時はハンカチではなく、タオルを首に巻いて使っていました。大切な人を亡くし

を深く考えるようになったという感想が寄せられるそうです。

尊さ、いじめや人間関係などを深く考えるようになったという感想が寄せられるそうです。

孝であると言っています。だからこそ、日頃から自分の命を守り、だれかに何かが起こったときは「助け合うこと

の大切さ」を学んでほしいです。自分の命は多くの人に支えられているのですから」



震災直後の自宅。がれきの中で14時間も閉じ込められていました



当時の写真で震災を振り返る庄野さん

「いのち」の重みを



自殺のない 「生き心地のよい社会」を目指して

ね ぎし ちかし
根岸 親さん (東京都) NPO法人自殺対策支援センター ライフリンク副代表

「声なき声」の大切さ

「私の父は自殺で亡くなりました。この一言を言うのに、父が亡くなってから10年以上を要しました。「自殺は弱い人のすること」「逃げたのではないか」「死ぬ気になればもっと何かできたのではないか」。そうした社会からの暗黙のメッセージを何となく感じていたように思います。自分自身の経験を振り返ってみても「言えない」ということは、何かを押し殺し、隠さなければいけないという負担を強いることになると実感しています。

同時に「声」が社会に伝わらないことで、「社会の問題」としての認識が広がらず、やっぱり「言えない」という悪循環にも陥りかねません。現状を少しずつでも変えていくには、当事者の方々に寄り添い、「声なき声」に真摯に耳を傾けることが欠かせないと感じています。

追い詰められた末の死
私たち「ライフリンク」が取

り組んできた自死遺族の方々、500人以上への聞き取り調査はそうした「声なき声」に耳を傾けた取り組みの一つです。調査に参加された遺族の一人ひとりが、亡き大切な方の自死について振り返り、語るといふ痛みを引き受けてくださったことでもさまざまなことが見えてきました。その一部は中間報告として『自殺実態白書2008』(ライフリンク発行)にもまとめています。

たとえば「自殺の要因は決して単純ではなく、自殺で亡くなった方は平均すると4つの要因を抱えていた」「自殺で亡くなった方の7割が、事前どこかの専門機関に相談に行っていた」「職業や立場によつて自殺に至る経路には特徴がある」などの実態です。

特別な人が特別な理由で自殺をしているのではなく、私たちと同じ日常を生きている人が、ふとしたきっかけでつまづき、問題が深刻化、複雑化した末に追い詰められて亡くなっていることが少なく

ないので。決して、私たちの日常と遠いところで起きていく「出来事」ではありません。

実態を知ることによる私たち一人ひとりのちよつとした認識の変化や寄り添いが、誰もが自分らしく生きられる「生き心地のよい社会」を作っていくことにつながるのだと思います。

痛みに寄り添いながら

東日本大震災では、多くの方々が突然、家や仕事を失い、そして、大切な方を亡くされました。想像を絶する深い痛みに、私たちは何ができるのか。考えた末に、私たちは、震災で家族を亡くされた遺族の方向けの電話相談を始めました。

徐々に「復興」へと進む中、家族を亡くした遺族が置き去りになることのないように、少しでも心の支えになれるように、その「声」に耳を傾け、寄り添っていかれたらと思っています。長い年月が必要かもしれませんが。誰もが追い込まれることのない、「生き心地の

よい社会」を目指して、これからも取り組んでいきたいと思っています。

プロフィール

8歳の時に父親を自殺で亡くす。関西学院大学在学中に、あしなが育英会のボランティア活動で、震災遺児や自死遺児の支援にかかわる。地方公務員(群馬県太田市教育委員会事務局)を経て、2010(平成22)年から現職。主に自死遺族への聞き取り調査や自治体との協働による自殺対策モデル構築などに携わっている。



まちのKIZUNAレポート



代表の高森さん

合言葉は「地球が教科書」

子どもたちの「生きる力」の育成が叫ばれて久しくなりますが、「いじめ」や「自殺」といった問題は依然として、後を絶ちません。高森拓也さんは1995(平成7)年に出身地、浜坂(新温泉町)で子どもNGO「懐」を立ち上げ、命の尊さを伝える活動を展開しています。

高森さんはこれまで51の国や地域を旅し、現地の人たちとのふれあいを通して、人や自然の命の輝きを肌で感じてきました。このような経験から、「懐」では「地球が教科書」を合言葉に、子どもを連れて主にアジア諸国を訪ねる「夢便」という旅を実施しています。子どもたちが現地の人々の生活や習慣を体験することで、生きるとはどういうことであるかを考え、「生きる力」を育むのがねらいです。

スタッフとして活動を支えるのは、子どもたちの親やOBたち。OBの中には地元で教員になり、次の世代を育てる側に回った人もいます。また、世界で活躍するアーティストや文化人たちの協力も得て、体験や実践を通して、子どもたちに「命の尊さの伝授」をすることもあります。

異文化体験で子どもたちの「生きる力」を育む

子どもNGO「懐」(新温泉町)



高森さんは全国の小中学校で講演することも。活動を紹介します。アジアの現状を伝えます



東日本大震災の被災地に支援物資を届けました



ミャンマーでは医療活動を学習



モンゴルの雪害の被災者に直接、衣類などを渡しました

活動から学んでほしいこと

これまでに「夢便」を7回実施し、5カ国を訪問。ネパールでは難民キャンプの子どもたちに日本で集めた文房具を届け、知的障害児養育施設やヒンズー教の葬送を見学。モンゴルでは雪害の被災者に、日本で集めた衣類や、チャリティーコンサートの収益金で購入した食料を手渡しました。バングラデシュでは日本の国際医療ボランティア組織「AMDA」の活動を見学し、ミャンマーではH1V感染者支援施設を訪ねるなど、内容の濃い活動をしてきました。東日本大震災でも、いち早く支援物資を届けるなど支援活動を行っています。

「活動を通して、言葉の壁を超えてこころのキャッチボールができるようになり、異国の風習や生活から『生きる力』へのアプローチを感じてほしい」と高森さん。そして、私たちが無意識に享受している生活のさまざまな当たり前を、今一度見つめ直し、いのちの大切さと尊さに気づいてほしいと話します。



あなたがいる場所

沢木耕太郎著(新潮社)



「キズナライブラリー」おすすめの一冊

ノンフィクション、フィクション、エッセー、写真とマルチにこなす沢木耕太郎さん。彼は短編小説の選集を編集する依頼を受けたことで、古今東西の短編小説を研究し、その面白さに気付いたそうです。そして、その思いが高じて、自身も短編小説を書き、一冊にまとめたのが本書です。

「孤独」「いじめ」「最愛の家族の死」などをテーマに、日常に訪れた劇的瞬間を描いた九つの物語が収められています。沢木さんはこれらの作品を書くにあたり、少年少女にも分かりやすく、最後まで読み通すことのできる文章を心掛けたといいます。子どもたちが文学に興味を持つ入り口として、読んでみるのもいいでしょう。



読者からのお便り

●5月号(特集テーマ:子ども)を知り合いから頂きました。我が家の子育ては一段落しましたが、親としてできることを今後も考えていく上で大切なことをいろいろと知ることができました。

(東京都・ジロチョー)

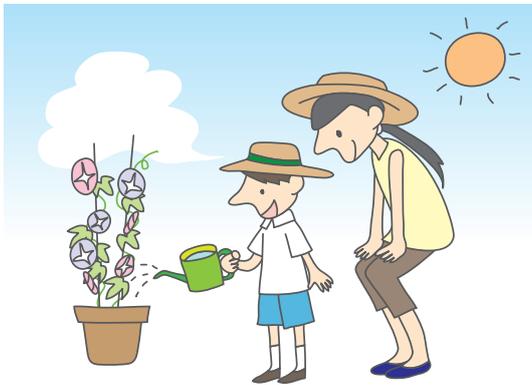
●子どもは大人を見て育つといいます。大人が元気の出る行動を起こせば、子どもも元気になり健康な心が育つと思います。「おやしサミット」などは好例です。

(高砂市・末森信子さん)

●1歳と3歳の子どもを連れて引っ越しをしました。地元に戻ったのですが、ママ友はおらず…。そんな折、子育て支援センターがあることを知り、週1回通い始めました。職員の方にアドバイスを頂き、ママ友もできました。勇気の一步は大切だと実感しました。

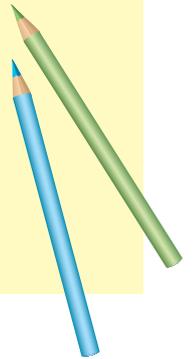
(丹波市・かずちゃん)

「きずな」のバックナンバーは、当協会または各市町の人権啓発担当部署にお尋ねください。



クロスワードを解いて、A~Jの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？

1	A	2	H	3		4	5
6		B		7	F	I	
		8	E				
9	10			11	D	12	
	13					J	
14	G			15	C		
16							



カタギのカギ

- 1 生き生きとしてまぶしいように光っていること。「命の○○○○」
- 2 庭園にあってニシキゴイが泳いでいたりします
- 3 想定外の大きさで沿岸に甚大な被害をもたらし、多くの尊い命が奪われました
- 4 茶の湯の作法。「結構な○○○○でございました」
- 5 誰もが誰かの○○に立ちたいと願っています
- 8 物事を成し遂げることのできる力
- 10 命を○○に振るようなことはしたくない
- 11 日本中の人々が東北を○○○○しています
- 12 復興の○○○○が響く日が待ち望まれます
- 14 遠からず日本は復興すると皆が○○同音に語っています

ヨコのカギ

- 1 もつれている物事でもあきらめずに皆で考えれば必ず良い○○○○策が見出せるはず
- 4 子を持って知る○○の恩
- 6 ○○つぶちに立たされても生きる望みは捨てないで
- 7 10億分の1メートルの精度を扱う技術
- 8 フリーマーケットとは「○○の市」のことです
- 9 どんな時にも失いたくないもの
- 11 声を詰まらせてむせび泣くこと
- 13 イノシシの子。子猿を背に乗せて歩く姿が人気の動物園もあります
- 15 ○○○であいさつを交わしたい
- 16 ほぼ確実であること。
○○○○○駄目だと思ふような状況でもあきらめないで

〈5月号の答え〉スコヤカナセイチョウ

お便り掲載者 クロスワード正解者 (抽選)

特製トートバッグをプレゼント!



「読者からのお便り」の投稿掲載者(9月号に掲載)とクロスワードの正解者(抽選で10人)に特製トートバッグをプレゼント。本誌「きずな」のご意見や感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。
※投稿はペンネームの使用も可能です ※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます

■応募方法・締め切り

はがきかファクス、メールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、氏名(ペンネームを使用する場合も要併記)、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を書いてください。8月1日(月)締め切り(必着)

■応募先

〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会「きずな編集室」
TEL 078(242)5355 FAX 078(242)5360 ✉ info@hyogo-jinken.or.jp

東日本大震災に関連する 投稿を募集します

阪神・淡路大震災を経験した県民の皆さんに、東日本大震災で被災された方たちへの想い、「いのち」の尊さ、復興に向けた取り組みなどに関する原稿を募集します。作品は本誌「きずな」に掲載します。

原稿内容／東日本大震災に関連した内容のもの

例) ボランティアなど被災地での支援活動に参加された体験記や感想
阪神・淡路大震災時の経験を踏まえた提言
被災された方たちへ復興に向けての応援メッセージ
今後求められる支援について

仕様／400字程度。手書き原稿、ワープロ原稿のどちらでも構いません。被災地や支援活動の様子などの写真があれば、合わせてお送りください

投稿作品の発表／本誌「きずな」の2012(平成24)年1月号から順次掲載します

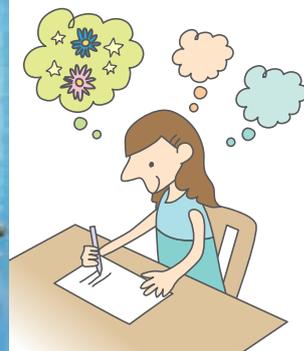
※投稿内容を一部修正していただく場合があります。あらかじめご了承ください
※投稿された人の中から20人に協会オリジナルグッズを進呈します

応募方法／電子メールか郵送で受け付け

9月30日(金) 締め切り(消印有効)
✉ info@hyogo-jinken.or.jp
〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15
県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会「きずな震災投稿」係

「のじぎく文芸賞」作品募集中

～あなたの思いを作品に描いてみませんか～



募集部門／小説、随想、詩、創作童話

応募条件／兵庫県内に在住、在勤、在学の人

応募作品／インターネット上を含む未発表・未投稿(他の文芸賞等への重複応募も含む)の自作の作品に限ります

※詳細については協会ホームページをご覧ください

応募方法／郵送で受け付け

9月20日(火) 締め切り(消印有効)
〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15
県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会「のじぎく文芸賞」係

イベントガイド

<p>西宮市男女共同参画センター 男女共同参画週間講演会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●日時／7月5日(火)10:00～12:00 ※一時保育あり ●場所／プレラにしのみや6階中央公民館講堂 ※阪急西宮北口駅から南へすぐ ●テーマ・講師／「子どもの安全と安心 わたしたちにできること」 森田ゆりさん(エンパワメント・センター主宰) ●問い合わせ／西宮市男女共同参画センター ウェーブ TEL 0798(64)9495(要申し込み)
<p>伊丹市ハートフルコンサート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●日時／7月5日(火)14:00～(開場13:30) ※手話通訳、要約筆記あり ●場所／伊丹アイフォニックホール ※阪急伊丹駅から北へ徒歩約3分 ●内容／じんけんコンサート「あなたに会えてよかった」出演：う～みさん(シンガーソングライター) ●問い合わせ／伊丹市教育委員会人権教育室 TEL 072(784)8113(申し込み不要)
<p>養父市人権講演会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●日時／7月23日(土)13:30～15:15(開場13:00) ●場所／養父市立八鹿文化会館ホール ※JR八鹿駅からバス「養父市役所口」下車、徒歩約2分 ●テーマ・講師／「いのちの感受性」落合恵子さん(作家) ●問い合わせ／養父市人権推進課 TEL 079(662)6142(要申し込み)

ハーフ タイム

兵庫県では多くの方が東日本大震災の支援活動に取り組んでいます。今月号で取り上げた方や団体も、早くから自分たちにできることは何かを考え行動しました。中には、阪神・淡路大震災でかけがえのない肉親や友人、教え子などを亡くされた方もおり、悲しみやショックを乗り越え、自らの使命として活躍されています。

今回取材した「アトリエ太陽の子」の中嶋さんも、そんな一人です。取材中、支援に訪ねた被災地のことを思い出し、何度も涙を流しながら、自らにも言い聞かせるように、継続した支援の必要性を話されました。この思いが、震災当時のことを知らない若い方たちにもしっかり受け継がれていくことを願ってやみません。(田中)